楔形文字における「音声」表記
—エマル文書の事例から—

池田 潤[†]

キーワード：楔形文字、エマル文書、表記、音声言語、文字言語

1 はじめに

城生佰太郎博士が『一般音声学講義』の中で指摘するように、音声言語と文字言語とは「別個の体系性を有する」 (城生 2008: 15)[1]。物理的音声が非離散的であるのに対し、文字言語の単位は離散的であるため、原理的に表記とその発音は一対一に対応しない。たとえば、日本語の「う」は IPA の [ɯ] にきわめて近いと言われるが (城生 1992: 47)、音環境によっては [u] と発音されたり[2]、鼻音化したりする (城生 1992: 52)。また、音環境によらず [u] と発音する方言もある (城生 1992: 51)[3]。こうした異音レベルの違いは、通常文字化されないため、文字言語ではなく音声言語の研究対象となる。

表記は一般に慣習によって多かれ少なかれ固定されている。そのため、日本語を漢字や仮名で表記する際、私たちは実際の音声にはあまり注意を払わず、学校で習った書き方で画一的に書く。ところが、まれに学校で書

[†]筑波大学大学院人文社会科学研究科

[1]この区別は現代言語学において必ずしも徹底されてこなかった。両者を別個の研究対象として確立することが 21 世紀の言語学の課題のひとつであると言える (池田 2006: 329)。

[2]たとえば、「む」や「ふ」の前の「う」は円唇化して [u] となる。

[3]さらに、「おとうさん」の「う」が [ɯ] でも [u] でもなく、先行する「と」のプロソディーを表記する点も興味深い。

き方を習ったことのない語句[4]を書く必要に迫られる場合もある。その場合、決まった慣習が存在しないので、自分なりに実際の音声を文字化しようと試みることになる。人によって音声の感じ方や書き方の好みが異なるために、またそもそも物理的音声が非離散的であるのに対して文字言語の単位が離散的であるために、当然のことながらこの種の表記にはばらつきも生じうる[5]。このように、実際の音声に注意を払いつつ、自分なりに実際の音声を文字化しようと試みる表記を本稿では仮に「音声」表記と呼ぶことにする。習ったとおりに画一的に書く通常の表記からは異音レベルの細かな音声現象が見えてこないのに対し、「音声」表記は不完全ながらも音声現象を映しており、音声言語研究と文字言語研究の貴重な接点であると言えよう。

本稿では、エマル文書を例に、楔形文字における「音声」表記の事例を２つ取り上げる。エマル文書とは、シリアの古代都市エマルから出土した粘土板を指す。文書の年代は紀元前 13-12 世紀で、大半がエマル語を母語とする書記によってアッカド語で書かれている[6]。

2 a～u

(1) /baqar-/ "flock, herd, bovines": **ba**-qa-ra (*Emar 6* 327:9) ~ **bu**-qà-ri (*Emar 6* 373:39, 43, 67', 175', 176', 185', 192'; 374:19', 20'; 378:1, 2).

(2) /kamar-/ "priest": **kà**(GA)-ma-ri (*Emar 6* 446:38) ~ **ka**-ma-[ri] (*Emar 6* 378:48') ~ **kà**-ma-ru (*Emar 6* 446:16) ~ **ku**-ma-ru (*Emar 6* 274:17; 373:134; 468:3').

(3) /kabur-/ "*kabur*-payment": **ka**$_4$(QA)-bu-ra (RE 20:20) ~ **ku**-bu-ra (RE 94:11) ~ **ku**-bu-ru (*Emar 6* 109:16; 110:25, 111:22; 130:18; *AuOrS 1* 67:19) ~ **ku**-bu-rù (*ASJ 12* 12:23; RE 33:22) ~ **ku**$_{13}$(KUM)-bu-ru (*Emar 6* 230:6').

---

[4]たとえば、方言の語彙、日本語に定着していない外来語、外国語の固有名詞など。

[5]一例として、英語の "initiative" を「イニシアチブ」「イニシアティブ」「イニシアティヴ」などと書いたりするケースを挙げることができる。

[6]エマルではエマル語を低位言語、アッカド語を高位言語とするダイグロシアが存在した。エマル文書とエマルのアッカド語の言語的特徴の詳細については、池田 (1995) 参照。楔形文字によるアッカド語表記の概要については、池田 (2001) 参照。

Pentiuc (2001: 234) も指摘するように、これらはアッカド語の語彙ではない。そのため、これらの語を楔形文字でどう表記するかは決まっておらず、書記は実際の音声に注意を払いつつ楔形文字を用いて自分なりに実際の音声を表記しようと試みたことになる。上記の例では、両唇音と軟口蓋音ないし口蓋垂音に挟まれた環境で母音の a と u が交替している。一般に、両唇音は隣接する音を唇音化させ、軟口蓋音と口蓋垂音は隣接する音の調音点を後退させる傾向が見られる。したがって、(4)〜(6)に見られる表記の揺れは、後舌の円唇母音 [ɒ] を離散的な楔形文字でなんとか表記しようとしたために生じたものと考えるのが自然であろう[7]。表記の揺れによって、楔形文字では通常書けないはずの母音が「音声」表記されている事例と言ってもよいだろう。

3 tu ~ tù

エマル文書では、アッカド語を書く際にもときおり「音声」表記がなされていた可能性がある。たとえば、音節 /tu/ は tu と書かれる場合と tù と書かれる場合とがある。tù は /tu/ とも読めるが、/du/ を最も基本的な読みとする文字 (DU 記号) である。

(4) 語中では tù が好まれる傾向がある。例 : iṣ-ṣa-ab-**tù**-ni "they arrested" (*Emar 6* 17:19), LÚ.mu-**tù**-ši "her husband" (*RA 77* 2:29), ti-im-**tù**-ta "(if) they die" (*RA 77* 2:39), ti-im-**tù**-ut "(if) she dies" (*Emar 6* 185:10'; *RA 77* 2:26).

(5) 語頭では tu と書かれることが多い。例 : **tu**-ri-iš "she will inherit" (*Emar 6* 185:13'), **tu**-uš-ša-ab-ma "she may live" (*Emar 6* 156:23), **tu**-še-li "(if) she produces" (*Iraq 54* 5:7).

(6) 表記に揺れのある語句も存在する。例 : 希求のムードを表す小辞 lū の後では両方の綴りが使われている。lu-ú **tu**-na-ab-bi "may she in-

[7]楔形文字には [o] を表記する文字が存在しない。

voke" (*RA 77* 2:12) ~ lu-ú **tù**-na-bi "may she invoke" (*RA 77* 1:8), lu-ú **tù**-ur-ša-šu-nu "may they inherit" (*RA 77* 2:42).

/tu/ という音節を表記するのに、(1) の例では DU 記号を使い、(2) の例では TU 記号を用いている。データをより子細に検討すると、(1) において太字で示した子音 t は有声音に挟まれている。これは、有声同化の起こる典型的な音環境である。これに対し、(2) における太字の t はすべて語頭に立っている。(1) と (2) だけを見ると、tu と tù が相補分布をなしているような印象を受けるが、(3) の例からそうでないことが分かる。したがって、上記の例にかいま見られる同化現象は機能的な音韻規則ではなく、速口で話した際などに自由異音として生じたものだと考えられる。このような異音を書記が書き留めていた点が興味深い。

【参考文献】

ASJ 12 = A. Tsukimoto, 'Akkadian Tablets in the Hirayama Collection (I).' *Acta Sumerologica* 12 (1990), 177-259.

AuOrS 1 = D. Arnaud, *Textes Syriens de l'âge du bronze récent*. Aula Orientalis Supplementa 1. Barcelona, 1991.

Emar 6 = D. Arnaud, *Recherches au Pays d'Aštata – Emar VI/1-4*. Paris, 1985-7.

池田潤 (1995)「エマルのアッカド語の言語的特徴」『オリエント』38(1): 1-15.

池田潤 (2001)「アッカド文字」河野六郎他 (編)『世界文字辞典』三省堂, 22-30.

池田潤 (2006)「文献言語学序説」城生佰太郎博士還暦記念論文集 (編)『実験音声学と一般言語学』東京堂出版: 325-334.

Iraq 54 = S. Dalley and B. Teissier, 'Tablets from the Vicinity of Emar and Elsewhere.' *Iraq* 54 (1992), 83-111 (+ Plates X-XIV).

城生佰太郎 (1992)『音声学』新装増訂三版, バンダイ・ミュージックエンタテインメント.

城生佰太郎 (2008)『一般音声学講義』勉誠出版.

Pentiuc, E. J. (2001) *West Semitic vocabulary in the Akkadian texts from Emar.* Harvard Semitic Studies 49. Winona Lake.

RA 77 = J. Huehnergard, 'Five Tablets from the Vicinity of Emar.' *RA* 77 (1983), 11-43.

RE = Beckman, G. *Texts from the Vicinity of Emar in the Collection of Jonathan Rosen.* Padova, 1996.